

陸前高田の応急仮設住宅団地 調査報告 〈速報版〉

2011 (平成23) 年9月6日

私たちは、8月4日から8日、16日から20日の2期に分けて、学生を含めて延べ66名が参加して、陸前高田市内の52ヶ所の仮設住宅団地を訪問しました。

自治会長さんらのお話を伺ったところ、団地の規模や入居時期などによって、自治会の運営や居住者相互のコミュニケーションや支えあいの状況に相当の違いがあることがわかりました。また、深刻な住環境の問題を抱えていることを伺い知ることができました。

一方、仮設住宅の環境改善やコミュニティ形成の工夫をしている団地、地域再生に向けて積極的に取り組んでいる動きを把握することができました。

詳しくは後日改めてご報告するとして、取り急ぎ〈速報版〉をお届けします。

3つのタイプの仮設住宅団地

自治会の運営や団地内のコミュニティ形成からみると、現時点で大きく3つのタイプに分けられると考えられます。

第1のタイプは、自治会長さんらのリーダーシップが十分に発揮され、団地内のコミュニティ形成が進んでいて、地域再生のエネルギーが醸成されつつある団地です。規模が比較的小さい団地や集落単位で入居している団地に見られ、仮設住宅居住者の団結力が高く、外部のボランティア団体やNPO等の支援を受けながら、環境の改善や行政との交渉を積極的に進めています。

第2のタイプは、規模が比較的大きい、又は厳しい立地条件にありながらも、自治会長さんらがリーダーシップを発揮し、外部資源を有効に活用しながら、団地の運営に工夫してコミュニティ形成を図ろうとしている団地です。今後、住民相互のコミュニケーションが十分に図れば、仮設住宅団地が地域再生のバネとして働く場になる可能性を持っているかと考えられます。

第3のタイプは、入居した元の居住地が大きく異なっていたり、自治会長さんが昼間仕事等でリーダーシップを発揮できない状況にあつたり、また住民相互のコミュニケーションが不足しているなどの状況にある団地です。このような状況が長く続くと、団地の中で孤立する方が出たり、解決すべき課題が潜在化してしまうことが危惧されます。自治会長さんらの負担を軽減するなど外部からの適切な支援が求められます。

仮設住宅団地の運営上の課題は、共通点もあれば、個別の事情もあるでしょう。それらを踏まえて、相互に情報交換の機会を持つことや、継続的に支援していく体制づくりが求められていると思われます。



パラソルの下でお茶会を開催 横田小校庭の仮設住宅団地



高田町や気仙町などから移り住んだ団地です。自治会長の山口さんや横田小の校長先生を中心に声かけを重ねることで、開放的な雰囲気づくりを実践してきました。

そうした中、ドイツの市民グループから送られた寄付金を活用して、パラソル付きテーブルを校門近くに設置したところ、瞬く間に仮設住宅居住者の方々が集まり、学生たちを相手に被災後から今日に至るまでの体験談や今後の生活について思いを語る場になりました。

山口さんらは、こういった気軽に話ができる場を活用しながら、仮設住民全体の意見・意向を把握していくことにしています。

地域通貨を使って住民交流

モビリアの仮設住宅団地（小友町）

オートキャンプ場のモビリアには、(社)中越防災安全推進機構のチームが縁あって常駐し、地元の運営スタッフとともに協議を重ね、団地の運営を図っています。

その一つとして、モビリアのみで使用できる地域通貨を発行し、子どもが朝の体操に参加したら、1モビリア、草取りやトイレ掃除で5モビリアを与えて、かき氷やソフトクリームと交換するなど、住民交流のツールとして活用しています。



これまで、住民の交流拠点であったセンターハウスを民間運営会社に返却せざるを得なくなったことやイオンスーパーセンター出張販売所の閉店など、新たな課題が出てきています。

カーテンの開け閉めで安否確認

竹駒小校庭の仮設住宅団地

竹駒町だけでなく、高田町や気仙町に住んでいた方々が多く、年齢も30代から70代まで幅広かったことから、支援物資の受け渡しを全員参加で行うことで顔なじみを増やしました。朝の7時にカーテンを開け、開いていない場合は、安否確認をするように住民に呼びかけ、孤独死の防止やコミュニケーションづくりに努めています。

〈調査に参加した学生の声〉

陸前高田市を訪れ、初めて自分の目で被災地を見て、地震や津波の怖さというものを実感させられました。元の美しい街並みはなく、瓦礫で埋め尽くされている海岸沿いはとても強く印象に残っています。また、仮設住宅をいくつか回り、どこの地区も自治会長さんを中心に復興に向けて努力されている方々や、お互いを心配し合う方々、私たちに快く震災の時の話を話して下さる方々に多くお会いすることができ、被災地の人々の強さや優しさを感じることができました。今回のこの調査から多くを学ぶことができました。今後とも自分たちに何か少しでも出来ることがあれば、協力していきたいと思います。

(法政大学現代福祉学部3年 徳永由弥)

支援を得て仮設の集会所を開設 米崎小校庭の仮設住宅団地



市内でも初期の建設であったため、床下に砂利が敷かれておらず、雨水がたまってボウフラが大量に発生したり、壁と天井のつなぎ目が落ちることが1週間に6件もあつたりと建築上の不備が多く、「苦労が絶えません」と語る自治会長の佐藤さん。

園芸団体の支援を得て「土・肥料・野菜の苗・プランター」のセットを全世帯に配布し、居住者が外に出てご近所の人と会話するきっかけをつくっており、孤独死の防止や住民相互のコミュニケーションに努めているとのこと。

集会は小学校の空き教室を提供されましたが、鍵の管理上思うように活用できない状況にありました。そうした中、民有地の無償提供が得られ、国連 NGO のセーブ・ザ・チルドレンの支援により、8月中旬に仮設の集会所が開設されました。住民の集会や行事に活用され、コミュニティ形成の拠点になっていくことが期待されています。

〈一口メモ〉

陸前高田市の永久保存文書の保存活動

法政大学サステナビリティ研究教育機構では、ジャパンプラットフォームの助成を受け、関係機関と協働して津波で浸水被害にあった陸前高田市の永久保存文書の乾燥、PDF化による保存活動を現在鋭意展開中です。

イベントを重ね住民を呼び戻す 町裏の仮設住宅団地（気仙町今泉地区）



自治会長の菅野さんらは、「今泉で暮らしてきた人たちに戻ってきて欲しい」と、4月に花見、6月に法要、8月に川開き等のイベントを開催してきました。また、「今泉の明日を創る会」（会長：河野和義さん）を立ち上げ、けんか七夕祭り実行委員会等と連携し、今泉地区を新たに再生するまちづくりの協議を始めています。

明治大学の学生たちが地形模型を作成して届けたところ、さっそくそれを使い、今泉の歴史と将来について学生たちに語ってくれました。会場となった金剛寺の不動堂は20名入れればいっぱい広さ。今泉に住んでいた人たちが帰ってきて入りきれません。そこで、外部支援者の協力を得ながら、気仙の木材を使った仮設集会所づくりを検討しています。

地域再生に向けた学習会を開催 要谷の仮設住宅団地（気仙町長部地区）

地域の絆を大事にしたいと、民有地を市に提供し、一緒に避難所生活を送ってきた要谷（ようがい）や福伏（ふっぷし）の人たちが離ればなれにならず、同じ仮設住宅団地に移り住むことができました。

仮設住宅居住者の目下の関心ごとは、転出後の住まいの再建に集まっています。「住まいの再建と集落の再生の道筋をみんなで一緒に検討したい」と、自治会長の武蔵さ

んらは「防災集団移転促進事業」に詳しいマヌ都市建築研究所の神谷秀美さんに依頼して、自治会主催の学習会を開催しました。会場となった要谷公民館には予想を大きく上回る33人の地元住民が参加し、熱心に聞き入りました。多くの質疑応答がなされ、関心の高さが伺われました。



この学習会には広田町大野・田谷地区からも参加者があり、「要谷に続け」と神谷さんを招いた学習会は9月10日に広田町でも開催されることになりました。

住環境上の問題を抱えた団地



砂利敷きの路面をアスファルト舗装にする等の改善が進んでいますが、上記の写真のように、踏み台を設けないと洗濯物が干せない団地など、住環境上の問題を抱えた団地が少なからず見られました。



明治大学の学生たちが作成した地形模型

この研究プロジェクトとは？

この陸前高田地域再生支援研究プロジェクトは、陸前高田市において、被災住民自身が地域の再生、生活再建に向けてその課題を話し合い、主体的な取り組みを行うことを支援し、仮設住宅などにおけるコミュニティの形成を支援するとともに、今後の復興における地域再生のモデルづくりに寄与することを目的としています。

私たちはそれぞれ法政大学・明治大学・東京大学・中央大学に所属し、建築・都市計画、地域福祉、社会学、臨床心理、公共政策学などの専門領域の研究者や実践家等の有志により共同で研究を進めています。

今回の調査にあたり、多くの仮設住宅団地の自治会長の皆様、住民の皆様にご協力をいただきました。貴重なお時間をいただくばかりか、お菓子をご馳走になるなど皆様に暖かく迎えていただきました。末尾になりましたが、心から感謝の意を表します。

今後も、様々な形で陸前高田に関わっていきたいと考えております。よろしく願い致します。

〈問合せ〉法政大学現代福祉学部 宮城孝
Tel : 042-783-2800
E-Mail miyasiro@hosei.ac.jp